

発達心理学概論[特論] 【第14-2講】

テキスト第Ⅷ章

書くことによる認識の発達

— 書くこと・考えること・生きること —

内田伸子

uchida.nobuko@ocha.ac.jp

書きことばのもたらす認知的所産

Vygotsky(1963)

「テクノロジーや道具の変化が労働の構造に変化をもたらしように話しことばや書きことばといったシンボル体系の変化は、精神活動の再構造化をもたらし。

人間の認識活動のあらゆる基本的形式は、その社会の歴史の過程で作りあげたものである。従って、シンボル体系に変化をもたらし社会文化的な変化はより高次の記憶や思考過程の、そしてより複雑な心理的体制化の基礎を形成する。」

Vai語のリテラシー習得の結果 転移する範囲は限定的だった！

Vygotsky仮説に矛盾するか？
→否

Cole & Scribner (1980)

読み書き技能もどんなふうにもどんな場面で使われるかが問題！

★領域固有→領域一般の技能になるはず！

e.g., 作文の推敲, 詩, 文章分析

●作文の心理学：所産⇒過程へ

作文の心理学

認知科学の興隆：

情報処理アプローチの強み：

→認知プロセスの記述の提供

- 1. Hayes & Flower (1980)**
- 2. 作文の発達過程を明らかにする**

- ①行動観察法**
- ②内観報告法**
- ③発話プロトコル法**



プロトコル分析が鍵を握る

作文の心理学

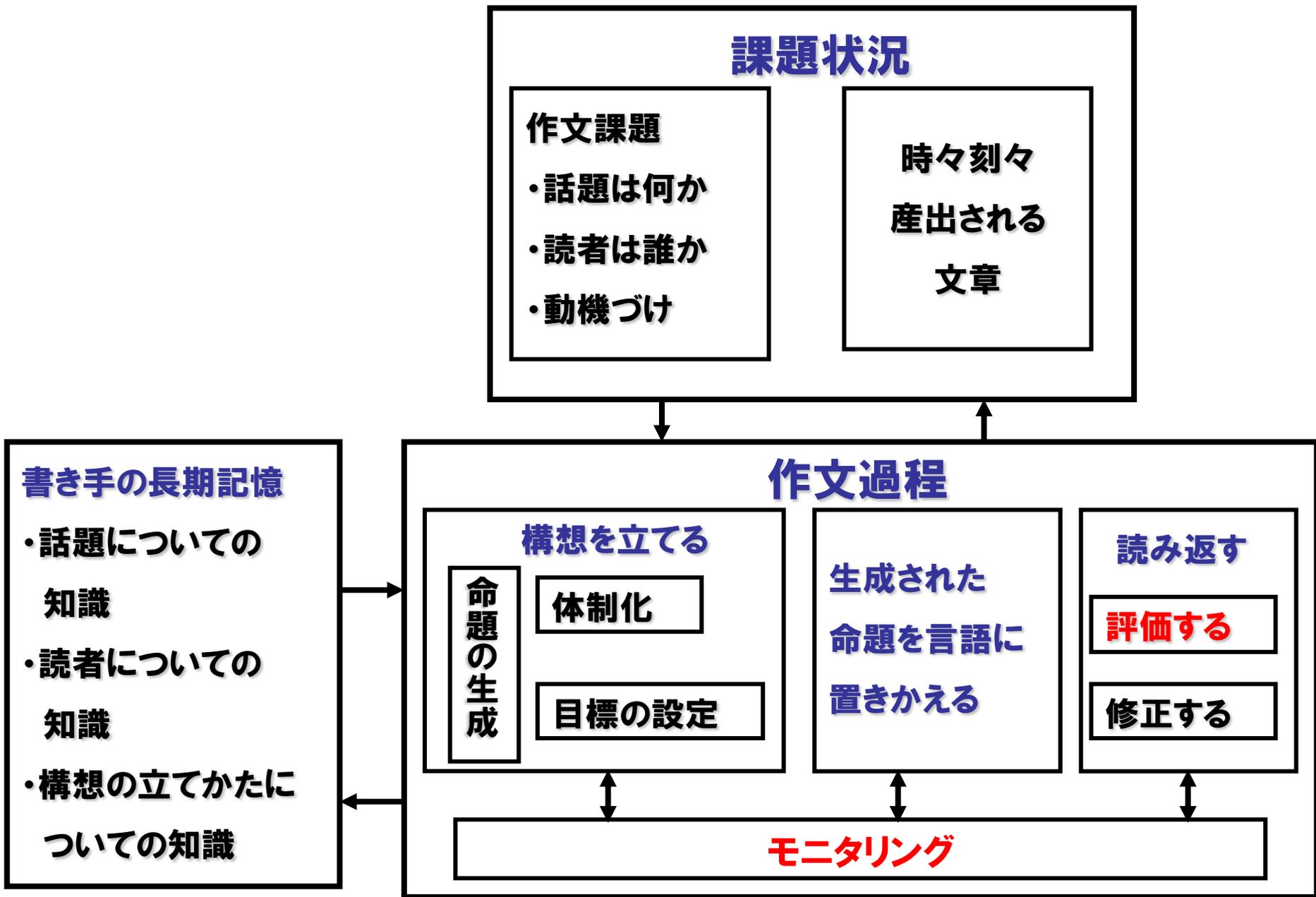
ことばと認識の関連：

文章を書く活動の意義は何か？

1. 作文の内容分析（70年代）

e.g. 守屋他(1972)

2. 作文の産出過程の分析（80年代）



課題状況

作文課題

- ・話題は何か
- ・読者は誰か
- ・動機づけ

時々刻々
産出される
文章

書き手の長期記憶

- ・話題についての知識
- ・読者についての知識
- ・構想の立てかたについての知識

作文過程

構想を立てる

命題の生成

体制化

目標の設定

生成された
命題を言語に
置きかえる

読み返す

評価する

修正する

モニタリング

作文産出過程のモデル (Hayes&Flower, 1980)

子どもの作文の推敲過程

RQ1

**表現と意図の調整過程では
頭の中でどんなことが起こっているのか？**

RQ2

**表現の外化と表象 (representation) の
関係は？**

子どもの作文の推敲過程

「推敲」…語を選ぶ

「彫琢」…文章を整え磨く



「自己内対話」の活性化

方法

被験者 附属小6年生10名

テーマ 自分が書きたいこと

書き方 「いつもの書き方で」

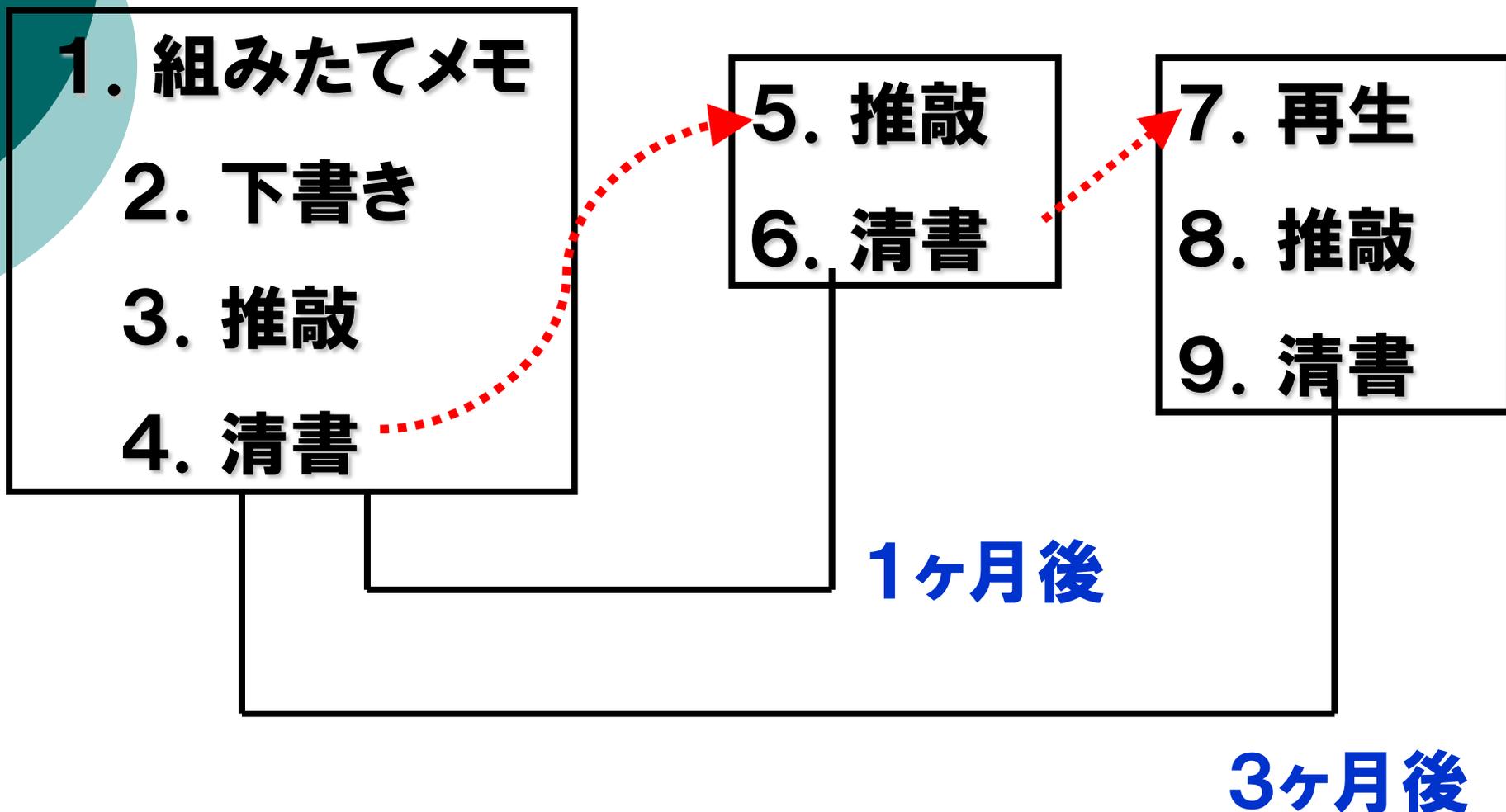
方法 <手続き>

①発話プロトコル法
(think-aloud protocol method)

②内観報告

③記録法; VTR&ATR

方法 <手続き>



自分を書き表すことによつて

六年一組 高橋 芽実

私はこの頃よく考えます。自分について、もつと知りたい。それもことばという形によつて表したいと思つたのです。そのため、今私が、「私自身」について知つていゝることから考え始めたいと思ひます。

私はどういふことが好きなのでしょうか。「本を読む」。読む時間と読む本が、あつたは、何をさしおいても本を読み始める私です。けれども、じつくりと読むわけにはありません。軽い読書が、私は好きなのです。

本を読むのが好きな人には、さつとしたわけがあります。本を読んでいると、頭の中の空気が新しくなつていくような気持ちになるのです。登場人物の姿を思い浮かべ、次から次へとページをめくります。だから、西遊記のように、空想して、いて楽しいもの、すゝみりしたものが、私のお気に入りになるのです。

「放送委員であること」。私は放送委員であることに、非常に満足しています。小さい頃から目立ちたかりやの私にびつたりの仕事です。五年から継続続けていますか、自分の声をみんなが聞いていいる、と思うのは、気持ちのよいものですよ。今では、あんなに委員長となっているんですよ。

とにかく、委員長の仕事も含めて、先生方に信頼され、学校の仕事をさす。というところが、私は好きなのですよ。

二のようにして考えなくては、何か私という具体的な像が浮かんできたような気がしてきました。始終いろいろなことを考えこいて私。目立ちたかりやの私。責任ある仕事をまかせられたと思います私……。

二二私は、はたと考えこみました。私という人間は、みんなにも単純な構造の人間なのだろうか、という疑問を持ったからですよ。それは、書き出した数か少なかったせいかもしれません。私の表現力が足りなかったせい

かもしれませぬ。けれど、それだけではない、
ような気がするのです。人間というのには、な
みの二とはばでは素せないものなのでは無いで
しょうか。なせならそれは、人間が作り出し
た二とはばだからです。心の中だけ通用する
二とはばで二を素せる、私はそんなふうに思っ
ました。

結局、私かはいめに考えるといったようにばば
ちませんぶでした。しかし、それでもよいでは
ありませんか。自分を書き表さうと考えるたこ
とによつて、心の二とはばに気づくこ
とができたのですから。

発話プロトコル例1(内田, 1989b)

しかし、それでもよいではありませんか。このことについて考えたことによつて、“心の中のことば”* /①※
「……ことばに気づくことができたのですから」
でもいいし、/②
「心の中のことばの存在*²」なんつったら気持悪いなあ。/③そんな、まるっきり気がつかないわけではないんだけど*³、/④
その、「心の中のことば」ってのは結局、口で言ってるっていうか、普通のことばっていうのにはあらわす前の段階の、そのモヤモヤした気持っていうんで、/⑤
そこで、そのことばっていうのは結局きまりがあって、そのきまりの外にあるっていう……P /⑥
だから存在に気づかなかったわけではないな……P*⁴/⑦
心の中のことば、やっぱり、このまんまでいい*⁵。/⑧
に気づくことができたのですから*⁶。/⑨

(注) 意識経験

- * ここまで清書したところで書いてあることを読み返して確認する。
 - * 2 笑いながら対案を出す。
 - * 3 自分自身が気づいていたかどうか事実の方を吟味する。原稿に書いてある「心の中のことば」という表現の意味を解釈している。
- P ポーズ
- * 4 対案を否定する理由がはっきりする。
 - * 5 原案を納得して受け入れる。
 - * 6 ※に続けて清書する

「意味単位」への分割と各単位のカテゴリ一名:①「読み返し」②「対案1賦活」③「対案2賦活」+「不一致感」④「吟味」⑤「意味解釈1」⑥「意味解釈2」⑦対案1・2を否定する理由づけ⑧「原案の受け入れ」⑨①に続く文の残りを清書するための「書字」

発話プロトコル例3

本を読むのが好きなのにはきちんとした*

さて「理由」にするか「わけ」にするか*²

まず、バランスとしては漢字を入れた方がきれいだけど*³

本来の意味としてはどっちだろうな

理由, わけ, 理由, わけ か—*⁴

理由ってすると こうだからこうするって感じだけど*⁵

これはそれほど確かなものじゃないし*⁶

こうだから, 自分の……その一, だから, 要するに,
面白いからってことがぬけちゃうから, これは面白い
からってことは普通の「理由」, 普通, 普通はそうだ

けれども, そこだけじゃないってことを言いたいから*⁷

「理由」ってすると, なんというのかな, 本をただ読めば

いいってことになるけど, わけがあるっていうふうに

すれば, こうなんていうのかな, もうちょっとしぼられ

ない, しぼられないじゃないかな

じゃ「わけ」にしちゃおう

わけがあります*⁸.

(注)

* 清書する

*² 原稿では「わけ」となっている.

*³ 「視覚的効果のルール」

*⁴ 口で何度もくりかえしている

*⁵ 「漢字使用のルール」

*⁶ 表現意図の分析

} 「漢字使用のルール」によって対案を
評価する

*⁷ 表現意図の再確認

} 「漢字使用のルール」によって対案を
否定し, 原案をとる

*⁸ 清書する.

<T.Y.(6年生)の推敲方略>

方略の名称	方略の内容	3年	5年	谷崎	三島
<u>文脈調和</u>	文脈に表現をしっかりと収める		●		●
<u>調和逸脱</u>	調和を破ることによる緊張				●
<u>接続</u>	文と文はなめらかにつなげる		●		○
<u>行間効果①</u>	余韻のある言葉			○	●
<u>行間効果②</u>	接続詞多用を避ける		●	○	○
<u>視覚的効果</u>	目でみた美しさ		●	○	○
<u>聴覚的効果</u>	発音・聴覚的感じ良さ			○	○
<u>漢字使用</u>	漢字の機能を生かす	▲	▲	●	●
<u>重複回避</u>	重複を避ける				○
<u>重複使用</u>	強調や昔話は重複を利用				
<u>句読点①</u>	意味の重要度;、<。、「」				
<u>句読点②</u>	読点は打ちすぎない	●	●		
<u>保留</u>	修正を保留				
<u>削除</u>	原案が納得いかなければ削除				

▲ ; 共通性はあるがプリミティブ ● ; 自覚的に使用している場合

○ ; 特に強調している場合

自分を書き表すことによって

六年一組 T.Y

私はこの頃よく考えます。自分についてもっと知りたい。それもことばという形によって表したいと思うのです。

.....中 略.....

登場人物の姿を思い浮かべ、次から次へとページをめくります。

.....中 略.....

結局、私をはじめに考えていたようにはできませんでした。しかし、それでもよいではありませんか。自分を書き表そうと考えたことによって、「心の中のことば」に気づくことができたのですから。

ことばの発見

登場人物の姿を _____ 〈清書〉

『姿を浮かべ』だとわからないから _____ ズレ

姿を頭の中に浮かべ、頭の中…がでてくるのかなあ
_____ 対案の探索

頭の中に浮かべてっていうか、考えていろいろと
さまざまに思い浮かべ、 _____ 対案の浮上

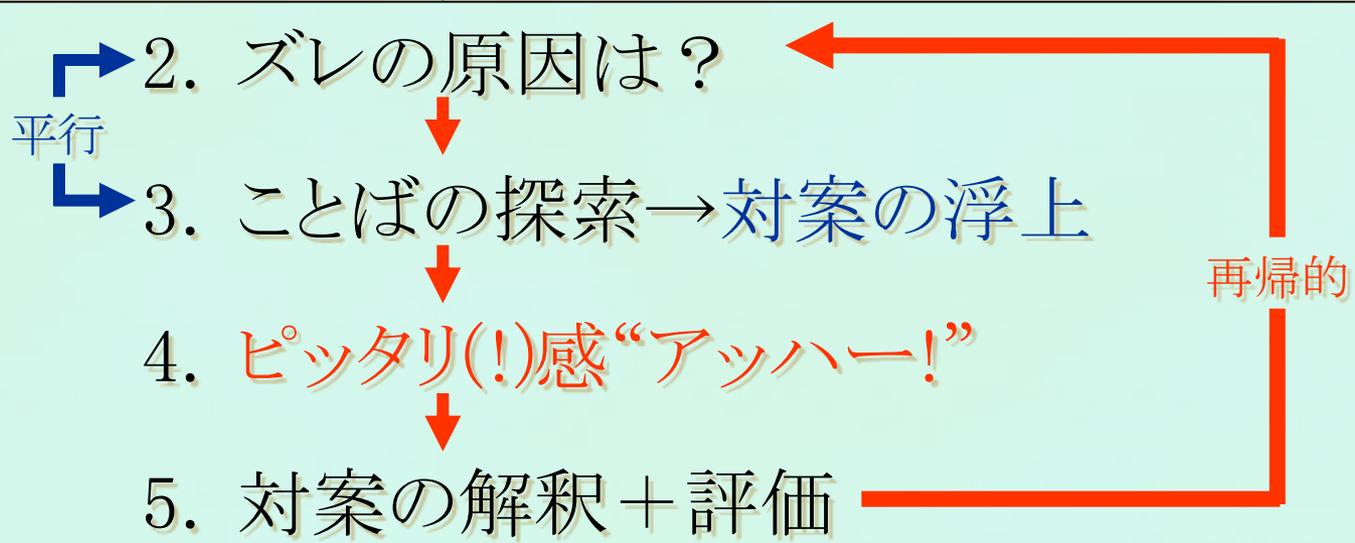
それだ！ _____ 納得

頭の中に浮かべてっていうか、考えていろいろと
さまざまに…ウウ…空想して、 _____ 解釈

思い浮かべ _____ 〈清書〉

表現と意図の調整過程

1. ズレの感覚



6. 受け入れ決定

ホッと、がっかり(´-`);

「私は、私が言おうとしていたコトバを忘れてしまった。すると具体化されなかった思想は陰の世界に帰っていってしまう。」

(Vygotsky, 1932/68 p.153)

**“言語は既製服ではない
思想は言語に転化するとき明確化”**

「てっちゃんは今とから 考えてるの。だから、はやく、おはなしできないの、」

「てっちゃん いろんなことば

おぼえたいの。てっちゃんのおたまにおしゃべりすること いっぱい

あるんだから」

(4歳)

灰谷健次郎『灰谷健次郎の保育園日記』

新潮社、一九九一年

T.Y.の感想

「ああ、これ以上は考えられない

もうこれ以上は欠点が見つけられそうにない。

こんなにことばについていろいろ考えたことは生まれて初めて。

作文書いて、本当に“書いた”って心のそこから感じてる。

とっても満足してる。」

「推敲とは何か？」

言語心理学受講者30名の回答の集約

- (1) 自分の伝えたいこと、表現したいことが伝わるか、
- (2) より洗練された表現はないか、など、表現をその妥当性、審美性の観点で評価すること、
- (3) 語句、文法、文章構成（例えば段落の作り方）、論理展開、リズム（文体、文章の流れに着目し、
- (4) 読者の視点に立って修正することである。

「推敲とは何か？」

この他2名の回答

「文章のジャンルや種類によって理解に力点を置くか、表現の洗練ということに力点を置くかは異なる。」

「文章を書くという作業は部分から全体を積み重ねていく継次的なものだが、推敲は同時に全体をつかみ、全体から部分を決めていくものだ。」

推敲や彫琢はいつ起こる？

「推敲や彫琢は表現の体裁を整えるのではなく、思考そのものを練る機会ではなくてはなるまい。」

「推敲や彫琢は自分のアイディアや表現意図を明確にするために組み立てメモを作る段階ですでに始まっているのである。」

内田伸子 『発達心理学--ことばの獲得と教育--』

岩波書店、1999年

推敲指導の意義

佐野齊孝

『生きかたをみつける作文指導—
「いまの高校生は文章が書けない」は
虚像だ』

—光社、1981年。

推敲指導の意義

定時制高校生への推敲指導：

**自分が表現したかったのは
何だったのか → 繰り返し推敲**



最初は3行→6～10枚にも

+ 満足感

書くこと (activity) と認識の関連は？

思想と表現の関係から

→ 推敲過程で何が起きているか



① 書くことによる新しいことの発見

② 推敲「指導」の意義

③ 自分自身の発見

＝ 生きることの意味の発見

書くこと (activity) と認識の関連は？

書くまでは何か新しいものを発見するとは思いませんでした。しかし、書く度に必ず新しい発見に出会います（遠藤, 1982）

人は自分自身の発見のために、整合的な世界の中心に自分自身を位置づけるために、文章を書くという営みに従事するのである。

チャーズ

『卡子』(遠藤 誉)

物理学者⇔8歳のときの体験

幻覚

「実存分析」⇔内観を文字にした！



幻覚からの開放

⇒物理学を捨てた！

遠藤誉『卡子』文春文庫，1992年

遠藤誉『中国動漫新人類—日本のアニメと漫画が中国を動かす』日経PB

- 「民主主義の国家においては主文化(メインカルチャー)と「次文化」(サブカルチャー)は相反する概念ではない。次文化は時代の淘汰を受け、あるものは生き残り、次世代の主文化を形成していくことになる。
- しかし社会主義国家においては、次文化の発展系として主文化があるのではない。なぜならば、**主文化は上からの強制的な思想統一的文化で、次文化は大衆が選び、大衆の間から湧き上がってくる文化であるからだ。**」(遠藤, p410)

精神文化のベクトル

トップダウンとボトムアップ p.410

「主文化は「トップダウン」で民衆に与えられ、次文化は「ボトムアップ」のかたちで世論を形成していく。二つの文化のベクトルはまったく逆を向いているわけだ。しかも民衆の立場に立てば、主文化と次文化は地続きではなく独立して存在している。それぞれを消費するにあたっては、心の中で「スイッチの切り替え」が必要となる。

- 私の解釈では、愛国精神に基づいた「反日感情を持ち合わせながら、どっぷり日本の動漫につかっている「心のダブルスタンダード」を中国の新人類たちは、まさにこの「スイッチの切り替え」を日々行っていると考えることができる。」(遠藤, p410)

おおきな木

シエル・シルヴァスタイン さくえ
ほんだ きんいちろう やく

